

【p 4～p 7】 「私、お医者さんになる。」 —横山醇—

1 資料活用にあたって

- 努力に焦点をあてれば内容項目はA（5）であるが、本資料は横山醇が抱いていた大きな夢に焦点をあてて内容項目はB（7）で扱う。
- 先人の場合、努力を続けることは誰しもあることで、その努力のみ書いてある資料は、内容項目はA（5）で扱い、努力を続けることになった大きな夢が描かれている場合は、その夢で内容項目を定めると考えられる。

2 資料の読み方のポイント

- 主人公の変化を問う資料ではなく、主人公（醇）の生き方を貫くものを考える資料であり、醇の立場で場面を捉えていく。（子どもが「醇」になって考えられるように発問を工夫する。）
- こういう資料の場合は、様々な苦労の場面で、それを乗り越えさせる原動力になったものを考える。本資料でその原動力となったものは、相手の立場に立って苦しみを取り除きたいという思いやりの心である。
- 医者資格はあるのにもう一度東京に行ったのは、実地経験を積むことで真に患者の立場に立ちたいと願ったからであろう。
- 当時はまだ小児科の医者が存在せず大人中心の医療だったのに対して、小児のみを対象とする医療の必要性を実践的に証明した横山醇の慧眼にも注目したい。

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 「播磨が見える BanCal（バンカル）」No. 60・61・62、(財) 姫路市文化国際交流財団

○ 横山醇の経歴

- ・ 1872年 兵庫懸揖西郡龍野町にて横山省三の長女として生まれる。
- ・ 1886年 同志社女学校入学。
- ・ 1892年 大阪薬学校卒業。ドイツ語と薬学を学ぶ。
- ・ 1894年 上京し済生学舎に入学。
- ・ 1896年 医師前期試験に合格。
- ・ 1897年 医師後期試験に合格。医師免許を取得。
その後、再び上京し、明治天皇の侍医であった弘田博士から指導を受け、日本で初めての小児科医となる。
- ・ 1900年 故郷の龍野で開業。その後長年にわたり地域医療に従事。
- ・ 1959年 逝去（88歳）。

○ 医学へのめざめ

- ・ 横山醇は、父省三の影響を受け、小学校卒業後、同志社女学校に入学する。醇が在校中に、同敷地内に同志社病院、京都看護婦学校も作られる。その看護婦学校に大きく関与したのが、新島襄の妻新島八重である。醇は、全寮制の同志社女学校生活の中で八重と寝食をともにするなかで大きく影響を受け、次第に、医学への道にめざめていったようであるが、裏付けとなる確かな根拠となる資料がないため、本教材ではそのことにはふれていない。

○ 地域医療に尽くした醇の姿

- ・ 「横山先生は、怖がる子どもにはできるかぎり注射をせず、寡黙な中にも非常にやさしい話し方で、診察してもらっただけで安心し、治ったような気持ちがしました。」と診察を受けた多くの人が語っている。また、子どもを診察してもらった人は、「先生にお金はいくらかと聞いたら、お金をもらうほどのことはしていない。言った通りにこの薬を子どもに飲ませるのを忘れないようにと言われた。」と語っている。
- ・ 当時は、節季ごとに患者から支払いに来るのが習わしだったが、支払うことができない患者に醇から請求することはなかった。そのことを証明するように、家族や最後の看護婦が「質素な生活だった。亡くなったときの身辺整理をしていたら箱いっぱいの請求書がでてきた」と語っている。「医は仁術なり」の信念を生涯貫き通した醇の人柄と診察態度がしのばれる。

4 展開の具体例

- ・ **主 題 名** ・ 人のためにつくす B (7)
- ・ **資料の概要** ・ 明治の初め、女性が医師になることが困難な時代、醇は、病気で苦しむ人を救うために医者になることを決心する。上京して医学校に進学した醇は、女子学生が不当な扱いを受けながらも初心を貫くために学問に打ち込み、やっとの思いで医師免許状を手にする。ふるさと龍野に戻り、子どもたちの診療に従事する醇の表情は、やさしさに満ちていた。
- ・ **ね ら い** ・ 病気で苦しんでいる人を救いたいという夢を貫いた横山醇を通して、誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にしようとする道徳的心情を育てる。
- ・ **展開の具体例**

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・学習する道徳的価値に関心を持つ。	最近、相手の立場に立って親切にしたことはありませんか。
展 開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・医者になると宣言した時の主人公の気持ちを考える。	醇は、どんな思いで「わたし、お医者さんになる。」と宣言したのでしょうか。 ・病気で苦しんでいる人を救いたい。 ・医者になれば、病気に苦しむ人を治すことができる。
	・不平不満を口にする仲間を励ます主人公の気持ちを考える。	「ここでくじけてはだめよ！」と仲間たちを励ます醇は、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・私もくやしけれど、医師になる夢を捨てたくない。 ・病気で苦しむ人が私たちを待っている。
	・再び東京に行き、実地での研修に打ち込む主人公の気持ちを考える。	医師免許状を手にした後も、なぜ醇は再び東京に行き、実地での研修に打ちこんだのでしょうか。 ・ほんとうに患者の立場に立つ医療ができる医師になりたいと思ったから。 ・まだまだ患者の経験が足りないと思ったから。
	・子どもの目を見てうれしそうに微笑みかける主人公の気持ちを考える。	子どもの目を見て、ただうれしそうに微笑みかけながら、醇はどんなことを思っていたのでしょうか。 ・病気で困っている子どもたちを自分の手で助けることができうれしい。 ・診察した子どものお母さんが心から喜んでくれることがとてもうれしい。 ・これからもみんなに安心してもらえるよう、患者さんの立場で考えることができる医者になろう。
終 末	・感じたことを書く。	感じたことを道徳ノートに書きましょう。

主人公が子どもの頃から「困っている人を助けたい」という気持ちを持っていることをおさえる

主人公が「困っている人を助けたい」という信念を持ち続け、困難な状況を乗り越えようとしていることをおさえる。

「真に患者の立場に立ちたい」と相手の立場に立って親切にしようとする主人公の心を考えさせる。

「困っている人のために思いやりをもって接しよう」という心情が、主人公を支え続けていることをおさえる。